

風土

今年の冬は久しぶりにまとまった積雪がありました。公民館をお預かりしていると、雪の降る前から心配なことがあります。それは屋根からの落雪です。

わが公民館はバブル時代の面影を残す3階建の瀟洒な建物です。その屋根は金属板せうしやうで覆われ、勾配が極めて急で、積雪があると巨大な雪の塊が怒涛の如く落ちてきます。その威力は凄まじく、直撃を受けた玄關脇の樹木の枝は引き裂かれ、ドスンという地響きが聞こえます。来館者の安全のため、軒下の通路は前夜から通行止めになります。ちなみに殿町のタウンプラザ(6階建)も同じ屋根の構造で、積雪時には隣接地の駐車場は利用が制限されます。

また県立美術館は銀色に輝く大屋根が、宍道湖に向かって緩やかなスロープを描いています。屋根の下は公園の一部ですが、金属製の巨大な大

屋根の滑りは誠によく、5cmの積雪でも一挙に落ちてくるので、危険で近寄ることもできません。しかも落雪による高い雪の壁で、美術館の目玉であるロビーからの宍道湖の眺望が、遮断されてしまいました。

これらの建物は、いずれも東京の著名な設計事務所の仕事です。積雪がほとんどない東京と松江では、雪に対する備えや感覚が根本的に違います。洒落たデザインの屋根から落ちる雪が、木々を引き裂き人や車を危険に陥れるとは思ってもみなかったでしょう。かつて日本家屋にはその土地の風土に合った建築様式がありました。現代のビル建築でも、その地の風土に配慮する余地があります。

風土は人々の意識や文化を育む大切なゆりかごです。降りしきる雪を眺めながら、今一度松江の風土について想いを廻らせてみたいものです。